

杉戸町今昔拾遺録

温古知新
杉戸の歴史を
こぼれ話
第18回

すまいの原型その3 フェイントライト イン アピットハウス

今回は、古代の住まいである竪穴住居が、具体的にどのような形をしていたのか、その構造についてのお話をします。

竪穴住居の最大の特徴は、地面を掘り下げて床とする半地下式の構造です。これは地中の温度が外気に比べて安定している性質を利用したもので、夏は涼しく冬は暖かいという、自然の断熱効果を活かした優れた知恵でした。床の平面形は楕円や角を丸くした隅丸方形などが一般的で、現在の6畳から15畳（約9×25m）の広さになります。なお、深さ1m程度まで掘り込む作業を「掘方」と呼びます。掘ったままの地面は凹凸が多いため、床付近の土に粘土や灰を混ぜて突き固め、「貼床」という平らな床面を造成しました。このひと手間が暮らして安心と安定をもたらすのです。また、すまいの中心には「地床炉」いわゆる囲炉裏が設けられました。この火処は、調理や暖房といった役割を担うだけでなく、その熾火の灯りは、家族の団欒を仄かに照らし、「交感の拠点」としての大切な場所を演出しました。

すまいの骨格を成すのが柱と屋根です。床面からは4×5箇所柱の痕跡である「柱穴」が見つかります。直径約50cm、深さ50×70cmの穴にしっかりと柱を固定し、屋根全体を支えていたと考えられています。

竪穴住居の外観を決定づける屋根の構造体は、土や植物といった有機質の材料で造られていたため、長い年月で分解され現存しません。そのため、柱穴の配置など、ごくわずかな手がかりから形を推測するしか手立てがありません。主に提唱されている復元案には、本を伏せたような二面構成の「切妻造」、四方に傾斜する安定感のある「寄棟造」、そして両者を組み合わせた「入母屋造」などがあります。

これらの屋根が大地から直接生えているように見える景観は、竪穴住居が自然に溶け込み共生する「すまい」であったことを物語っています。原始時代の人々が自然を巧みに利用し、共同で築き上げた生活の舞台、それが竪穴住居なのです。



（社会教育課 町史・文化財担当編）



わが家のアイドル



掲載された方には**特製カード**をプレゼント！
皆さんのステキな1枚をお待ちしています！

詳しくは
こちら▶



こちらから
簡単応募！▶



かしわぎ あいか
柏木 逢花ちゃん
令和6年4月17日生
かしわぎ ひなた
柏木 陽向ちゃん
令和6年4月17日生

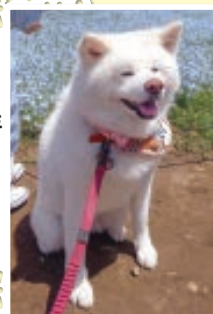


仲良し
双子兄妹！
1歳の誕生日
おめでとう！

たなか ゆうすけ
田中 優助ちゃん
令和6年6月23日生
まだ夢の中



あか 陽菜
赤沼 メリーちゃん
平成29年8月17日生
いつまでも
元気で
長生きしてね！



きく た
菊田 ココちゃん
平成22年4月18日生
いつも優しい
ココちゃん、
大好きだよ！



なか やま
中山 ひなちゃん
令和元年6月5日生
なか やま
中山 うたちゃん
令和3年7月13日生
いつも優しい
ひなお姉ちゃんと
甘えん坊なうた。
仲良し姉妹



はね じ
羽地 ゆずちゃん
令和4年5月3日生
炊飯器の上、
落ち着く
ニャー
(ニハハハ)



UD FONT
by MORISAWA

読みやすい書体であるユニバーサルデザイン
(UDフォント)を使用しています。



杉戸町
ホームページ



メール配信
「すまゐ。」



広報スマホ版
マチイロ



杉戸町
公式LINE



杉戸町
公式X